

## 【表現学関連分野の研究動向】

## 文章・談話研究

石黒 圭

日本語を中心とした言語研究は、70年代から90年代にかけて内省に基づく記述的文法研究が繁栄し、2000年以降はそれに代わってコーパスに基づく定量的語彙研究が席卷した。しかし、そうした研究動向も一段落した2020年、言語研究は新たな節目を迎えている。文章・談話研究も、接続詞を例にとると、内省的記述による接続類型の研究、コーパスを用いたジャンル別の接続詞の出現傾向の研究は過去のものとなり、新たな観点からの研究が増加している。ここではそれを三つに分けて紹介する。

一つ目は、接続詞の多様な機能に注目した研究である。井伊菜穂子「接続詞の接続領域の性質と認定基準」(『一橋大学国際教育交流センター紀要』2, pp.31-42)は、塚原鉄雄氏の機能領域の着想をもとに、接続詞の「どう」つなぐかではなく、「何を」つなぐかを対象に、分析方法を確立した点が斬新で、今後の発展が期待される。

また、井伊菜穂子・石黒圭「上級日本語学習者の接続詞「でも」の使用実態と困難点」は、国立国語研究所の『BTSJ 日本語自然会話コーパス』(宇佐美まゆみ氏構築)のシンポジウムの発表であるが、会話の接続詞が論理的機能よりも対人配慮的機能に基づいて用いられる点を実証しており、接続詞研究の新たな方向性を示している。

二つ目は、接続詞を新たな観点から捉えた研究である。李婷『日本語教育におけるメタ言語表現の研究』(ひつじ書房)は、佐久間まゆみ氏の接続表現の文脈展開機能と「段」の多重構造の枠組みに依拠して接続詞を論じている。接続詞をディスコース・マーカーではなくメタ言語表現として捉えた点で、新風を吹きこんでいる。

三つ目は、言語習得の観点から見た接続詞研究である。董芸「日本語学習者の作文における並列・継起の接続表現の習得」(『国立国語研究所論集』19, pp.127-138)は縦断学習者コーパスを用いて学習者の成長過程を捉えた点に特徴がある。並列・継起の接続表現が他の接続類型とは異なり、複文⇒連文ではなく、連文⇒複文の習得順序になることを明らかにした点が興味深い。

また、石黒圭「授業活動として行う日本語学習者の読解」(野田尚史編『日本語学習者の読解過程』pp.225-244, ココ出版)は、ピア・リーディング授業において文章にどのような接続詞を入れるのが適切か、学習者が自ら考えた答えをグループ内で対話させ、接続詞をメタ認知させることで接続詞の用法が身につくことを論じている。

このように2020年の文章・談話研究における接続詞研究は、内省による記述研究、コーパスによる定量研究といった確立した方法論に基づかず、多様なアプローチの競演による、いわば総花的な様相を呈している。今後も、多角的な手法によって言語の実態が明らかにされる研究の増加が予想され、言語研究の多様化の時代のなかで、文章・談話研究がさらに盛んになることを期待したい。

(国立国語研究所)